

# 窓辺

もり ひろし  
毛利 博

## 「聖職」から「労働者」へ

過重労働から精神的に追い詰められ、不眠や鬱病になり仕事ができず、休職や退職に追い込まれ、最悪の状況では自らの命を絶つという痛ましい



い事象が起こりました。「残業」が古い時代の

「美德」から「悪」に変わった瞬間です。適切な労働時間を決めるために「働き方改革」が始まりました。主な狙いは、働き過ぎを防ぎ働く人たちの健康を守って多様な「ワーク・ライフ

・バランス」を実現することと、雇用形態に関わらない公正な待遇の確保です。この改革は医療の世界でも進められ、2年後には医師も含めて施行されます。

医師は常に患者さんのために尽くす「聖職」と私は考えてきましたから、この改革で「労働者」と定義されることには少し違和感があります。改革は医師の労働時間を厳しく管理することを要求しています。医師不足の中、医療の理想と制度の狭間で病院は対応に苦慮することになります。制

度には光と闇の部分があります。職種によっては柔軟な対応を検討してもらいたいものです。

医師不足を放置したまま改革が進めば、医療にさまざまなゆがみが生じることが懸念されます。医療の集約化も考慮すると、患者さんがいつでもどこでも受診できるフリーアクセスの原則は阻害され、主治医制度の在り方などにも影響が出てくるかもしれません。

医療者の働き方改革は大切です。しかし、利用者である患者さんにも少なからぬ影響が及びます。これらの医療の在り方が問われることになると思います。

（県病院協会 会長）  
藤枝市病院事業管理者